



小説

松山
城下怪談

越智魔琴

物が怪
かたり



水書堂

目次

はじめに

第一章 化け物がたり

お菊井戸

杜若屋敷

瞽女石

わやくの平七

刑場の老婆

湯屋の出来事

御幸寺山の怨霊

廃部屋の怪

古家異話その一 水野家の借家

古家異話その二 道後の百姓家

古家異話その三 大街道の古家

古家異話その四 高浜の古家

第二章 憑き物がたり

蒲生断絶

湧が淵の大蛇

四国と狐

お袖狸

お袖狸異聞

狸が伝えた葉

はじめに

不思議なものを見たり、人智では理解しかねる出来事が起こった時、それらを多くの人々に伝えて、自分を安心させようとするのは、永遠に変わらない人間の性なのかもしれません。それらの不思議な話は、人々の心や時代の変化を経て残ったものだけが、地域に伝わる怪談や伝説となりました。

本書は、松山に残る藩政時代の怪談や伝説を集めたものです。西園寺源透編『伊予奇談伝説』や『豫陽郡郷俚諺集』『伊予温古録』などに記載されていた話をベースに、新たなストーリーや解釈を付け加えて、短編小説のカタチにしてみました。もとの話とストーリーの方向やテーマが大きく異なったものもありますが、多彩な趣向の物語を楽しんでいただけるように配慮しています。

松山の怪談はバラエティに富んでいます。全国的に知られている話と似たものもありますが、それらの物語の中には、伊予国松山藩固有の地名や文化が付加され、独自のストーリーと変化しているものもあります。本書で、松山藩時代の怪談をお楽しみいただきたいと思います。

松山に残る数多くの怪談のうち、第一章を「化け物がたり」として幽霊話を集めました。弱者が死者となることで不可思議な力を身につけ、勝者となった者たちを成敗する話が多くを占めています。

第二章を「憑き物がたり」として、妖怪が登場する話です。この章では、天狗や大蛇、狐、狸といった凋落した神や眷属たちが織りなすストーリーを集めました。

折口信夫氏や梅原猛氏は「ものがたり」の「もの」は「物の怪」であり、霊が語るものが「ものがたり」であると著作で記しています。

本書は、藩政時代の松山の人々が、さまざまな想像力を働かせて紡いだ、物の怪たちの「ものがたり」であるという意味を込めて「松山ご城下怪談 物の怪がたり」というタイトルにさせていただきました。

そういえば、松山藩で愛好されていた能楽もまた、霊が過去を語る「夢幻能」が形式の一つとなっています。松山という風土の中で醸された怪談の数々を、ぜひお楽しみください。

お菊井戸

秋晴れの透き通るような空が広がっている。城山の麓に漂う日向の匂いが、楓の鼻をくすぐった。

「ああ、面白くない」

楓の口癖である。

二の丸へと向かう道を三年も通っている。この道からは、ひと際綺麗にお城の天守が浮かび上がって見える。

雲ひとつない空のせいだろうか。

楓は、青空の下から逃げるように二の丸の屋敷を目指して足を早め、透き通る空のもとで首を振った。

日向に育つ雑草は、秋の陽射しが眩しいのか、草臥れた姿を見せつけている。

城山の森の手前には黄色い蕾を固く閉ざした宵待草が、木の陰に隠れて伸びやかに育っている。

楓は、陽の当たる場所を避けて夜を待つ宵待草を、自分のことのように愛おしく思った。



楓は、二百石取りの馬廻役・竹内慎之介のひとり娘である。慎之介は跡継ぎの誕生を望んでいたが、妻のお時の体が弱く、子供は楓一人しか授からなかった。慎之介は、楓が成長してから跡継ぎを娶ればいいと考えた。

たったひとりの娘にはどうしても甘くなる。慎之介の無秩序な可愛がりは、楓の心に我が儘の種を運び、傲慢という蔓を茂らすのに最適な環境になった。しかし、楓は頭の回転が早く、機知に富み、物怖じしない性格でもあった。

幼い頃の楓には、人を殺めたという噂がつきまとった。

きっかけはほんの些細なことである。家の近くの堀の広場で供の者たちと遊んでいたら、見たこともない子供がやってきた。首に縄をくりつけた犬に引つ張られてやってきたらしい。その子は、草臥れた紺の縞木綿に草履を引つ掛け、しわくちゃの袴というみすぼらしい格好だ。体よりも大きな刀が脇に刺していることで、かろうじて侍の子だとわかる。

楓についてきた奴の与助が、犬と子供を制した。

犬が楓めがけて走ってきたので、与助は犬の胴を思い切り蹴った。犬は、ギャンと叫んで、二

尺ほど空を飛んでから、小さくクウンと鳴くと、尻尾を下げてどこかに走り去った。

「何をする。犬が何もしとらんのに、いきなり蹴飛ばすのはおかしかろうが」

子供は与助に食ってかかった。

「お前こそ、犬をきちんとしつけとかんと、あかんかろうが。今は、犬公方様の時代じゃないんやぞ」

「犬は走るのが仕事じゃ。うちの犬は噛みつきなんかせんわい」

「犬が走るのが仕事なら、わしはお嬢様を守るのが仕事じゃ。襲うてきた犬を蹴って何が悪い。」

そもそも、竹内家は家老にもつながる家柄。伊達に二百石の禄を貰うておらんわ」

「なんじゃ。あしの家は徒士じゃが、殿を守ることに相違なかるうが」

「口の減らん餓鬼じゃのう。まだ世間の仕組みを知らん子供とは話もでけんわ」

この口論に人が集まってきた。遠まきに見ている人たちからは、幼いのに奴侍に食ってかかる子供の態度が快哉となるのか、次第に子供への応援の声が高まってくる。

楓は、つかつかと前に立って、子供の胸を突いた。

「何をいうの。あたしが犬に襲われようとしているのを、与助が助けようとしたのじゃないの。ただそれだけ。あんたのは理屈にならない屁理屈よ」

「……………」

言葉に詰まるところを、楓はさらに子供の胸を突いた。

子供は、ゆらりと体を揺らすと、足を滑らして堀に落ちた。そして、頭をしこたま堀の岩に打ち付けた。

頭から血を流して、体をピクピクさせている。

人々の間から、悲鳴が聞こえた。

若い町人が堀の中から子供を引き上げた。

子供は、楓を指差して引き攀れた声で「人殺し」と呟いた。

それからである。楓が人を殺めたという噂が立つようになったのは……………。

子供は怪我をして二ヶ月ほど寝込んだが、死には至らなかつた。子供は徒士の角田俵太の息子で、勝助という。楓の父・慎之介は十両の詫び金を俵太に渡し、このことを内密にするように頼んだ。このことがよくなかつたのかもしれない。

俵太は、この金でご城下から遠く離れた風早に田畑と家を買ひ、出世の見込みのない武士から農民の身分となって移り住んだ。もちろん、家移ることは内密との約束を守り、黙っていた。周りの人々にすれば、今まで住んでいた俵太や勝助の姿が急に見えなくなつたことで、何かの異変があつたと考えるのが当然である。ここに噂が広がる土壤ができてしまった。

かくして、へ竹内慎之介の娘・楓が角田俵太の息子・勝助を堀から突き落とす、二ヶ月ほどで死んだ」といふ噂が松山ご城下を駆け巡った。噂には尾緒がついてくる。伝わっていく過程で、楓が刀で刺したとか、屋敷で何人も楓に殺されたといった過激なものや、二百石取りの侍の悪事を徒士の俵太が知ったため、一家が皆殺しになったとかいふ、物騒なものも出てきた。

噂というものは不思議なもので、当人以上に噂の訳を語ったり、的外れなことを伝える人物が必ず出てくる。当人の話など聞いていない者やあったことのない人物までが、噂の主のことや事件を面白おかしく伝える。そのために、話の内容がどんどん変化していく。一度、動き出した噂は、人々が飽きるどころまで行きつかないと収まらない。噂を信じている人たちは、「みんながそういつているから、それは本当に違いない」と思ってしまう。そして広まった噂は、本当のこととして瞬く間に伝わる。たとえそれが荒唐無稽でも、真偽は問われず、噂や流言が真実であるかのようにはびこってしまうのである。

こうした噂の根底には、家柄と能力と美醜の狭間での差別意識が根底にあり、それに妬みと嫉みの隠し味がつきまとう。いわば悪意の塊が噂なのである。

もう一つ厄介なのは、噂にのぼる人物に名誉や権威、人気などがあると、そうした噂は絶えることがない。というのは、何も知らなくても、噂に潜む悪意に共感する人たちが多いためだ。

慎之介と楓は、噂を否定することを諦めた。

当人たちがいくら否定しようとも、「火のないところに煙は立たぬ」とかの陰口が横行し、それがさらに噂を広める原動力になる。もう一つ厄介なのは、噂にのぼる人物の名前を知っている人が多ければ多いほど、その話に興味を持つ人が増え、いつまでも噂が続いてしまうのである。こうして、噂という悪意は一人歩きを始める。しかも、話はどんどん陳腐で差別的な内容に進んでいく。噂は伝える人の心根をも移していくのではないかと、楓は思う。



楓は、この噂のために元々の活発な性格が陰を潜め、家に閉じ籠って本ばかりを読むようになった。

これを心配した慎太郎は、楓か幾分かでも社交的になるようにと策を弄じ、御殿女中としての生活を楓に与えた。ここなら、有望な跡継ぎも見つかりやすい。かくして、楓は十八歳から城中に通い始めた。

勤め始めてから三か月目のことである。賄方の津田新左衛門という男から楓は恋文をもらった。

廊下を曲がったところに新左衛門が待ち構えていて、ぺこりと頭をさげると文を押し付けられたのである。

「見てくだされば、私の気持ち綴られております」

戸惑う楓に、新左衛門はこういつて、そそくさと姿を消した。

恋文には、妹のように思い慕っているとあり、和歌が添えられていた。

「逢ひ見てのいまの思いのその上に 昔は恋を思はざりけり」

楓は、この和歌は権中納言敦忠の剽窃だと思つた。しかもあまり出来の良くない方の……。

楓は、こんな陳腐な歌を、恋文につけてくることが理解できなかった。

新左衛門は平凡を絵に描いたような風采で、へのへのもへじの方がまだ愛嬌がある。いつも決まり切った小袖と袴をきちんと着ていて、その無難さも楓は気に入らなかつた。

恋文のことを楓から聞いた慎太郎は、話を進めようかと楓に問うたが、気乗りがしませんと無下に断つてきた。落胆した慎之介だったが、仕事をし始めてからすぐにこのようなことが起こつたことを喜んだ。

楓は、この歌が百人一首ではなく、平安時代の和歌集か、または在原業平の和歌をそのままに送る方が良かったと思う。

「こんな稚拙な歌で女心を奪われるわけがない……」

仕事はできるといふ評判の新左衛門だが、このような和歌を好きな女性に贈るくらいだから、出世には無縁だと楓は考えた。そこで、父親が槍の師範級であることを理由に、「文の道は大切ではございますが、武道のお好きな方がもつと好きでございませう」と記し、返歌を送つた。

「妹の身にあうたのみこそ悲しけれ わが身は人の妹にこそあらん」

小野小町の和歌を下敷きにして、私はあなたの妹なんかになりたくないという意味の歌を返した。送つてきた歌よりは少しだけましな歌である。

おそらく、自尊心を傷つけられた新左衛門が、噂を振りまいたのだろう。楓は家柄を鼻にかけ、男の恋をすげなく断つたという噂も家中に広がつた。しかし、この噂はすぐに消えてしまった。

ただ、あの小男は城内で頭角を現し、三年が経つた今では勘定方の中心として「算盤」そろばんを切り盛りしている。破談にしたのは早まったかもしれないと慎太郎が何かの折につぶやいたことがあるが、楓は、あの顔を毎日見なくてもすんだことに、これで良かったと思つた。

御殿女中には若い女が多く、仲間のそれぞれの振る舞いや周りの人たちの言行が噂話の題材になる。

噂には、思い込み、嫉妬、陳腐な筋立て、願望、恐怖、差別、悪意といった要素が含まれてい

ることに楓は気づいた。

ちつぽけな噂でも、時間が経てば経つほど成長し、力を増していくものがある。ずっと前に流されていた噂が復活することもある。これらは、噂の主の認知度によるようだ。楓は考える。社会的な地位が低い、誰も知らない登場人物だと、噂はすぐに消えてしまう。長く続く噂は、登場人物がそれなりの地位でなくてはならず、これらの噂には妬みや嫉みが渦巻いているのだ。

また、登場人物がいかにもしうだと確信を抱かせる噂ならば、たちまちのうちに噂は広がる。たとえ、それが真つ赤な嘘だったとしても、聞く人が確信を持つようになればいいのだ。噂は、聞く人たちの好奇心を満足させ、噂を伝える人たちに達成感を抱かせれば、噂はいつまでも広がり、新しい噂が次々に誕生していくのである。

そして情報通といわれる無責任な人々がそれを無自覚に広げる役割を果たす。噂をばらまく人たちは、自分たちは弱くて善良だと信じている。そうした善人たちが群れをなして噂を作り出し、自分たちと無関係の人物を怯えさせている。そうした人々に、噂を振りまいてもらえばいい……。

今の楓が、胸を焦がしているのは、小姓の庄之助である。

役者のような大きな眼と、ききりと結んだ愛らしい口が楓の好みである。細かな気配りができるところと、老若男女、誰にもやさしいところも気に入った。

楓は、今まで独り身を通してきたのは、庄之助のせいだとも考えてもいる。

庄之助と家中ですれ違ふ際には、好意が伝わるように時節の挨拶を欠かさない。返事は帰ってくるものの、楓の思いなど庄之助は少しも気に留めてくれない。

庄之助の素っ気なさが、ますます楓の心に恋の炎を燃えあがらせる。

楓の周りに、庄之助の恋の噂が届いた。

相手はお使い番のお菊だという。

二の丸の裏木戸近くにある石垣の下、庄之助が石垣の裏に隠れてお菊を待っていた。その場所に、仕事を終えたお菊が急いで駆けつけたのを幾人かの腰元たちが見ていた。

月明かりのなかを歩くふたりの様子は、誰が見ても恋仲のようだったという。

ふたりが付き合うきっかけは、お菊が庄之助のところに書面を届けたことだ。

庄之助は書面を誰が届けたかの確認のために名前を聞いた。

「はい、お菊と申します」

庄之助がその名前をからかった。

「菊というと大輪か野菊か懸崖か、どの菊なのでしょうっか」

お菊も、意外な質問に、自分もこの侍をからかつてみようと思ったのだそうだ。

「大輪の菊は世話に手間がかかると申します。懸崖の菊は自分の思うように手間をかけないと、その通りにはなりません。野菊ならば手間はかかりませんが、純朴なところがあ、華美にはなりません」

「拙者は、野菊のように手間がかからず、大輪のような花を咲かせてくれる菊が良い」

「まあ、欲張りな……。父がよく申しておりました。お前は秋に生まれたわけではないのに菊と名付けた。なぜかと思う」

「どうしてですか」

「人の言葉をよく聞くように、聞いて正しい行いをするように育ててもらいたいからだ……。」「いつ生まれたのですか」

「はい、夏でございます」

「それは気の早い。ぬしの父親は、暑さに負けぬ気の良い娘に育ててもらいたいと、わざと季節を変えて名前をつけたのではござらぬか」

お菊は、庄之助の機知と、その優しさに好感を持ったのだという。

噂によれば、ふたりが口をきいてから一週間後に二人は再び出逢っている。

廊下ですれ違った庄之助がお菊に声をかけた。

「よく考えましたところ、拙者は野菊が好きでございました。その飾らなさも好きでございました」
「どうして、こんなことをおっしゃるのですか」

「それは、野菊のようなあなたと話したいと思っていたからです。そして、今日お会いできたのも神のご加護と感謝しております」

「まあ、それはそれはご大層な……」

ふたりは笑い声をあげた。

庄之助は、お菊に文を渡した。

「これはなんですか」

と、戸惑うお菊に庄太郎は優しく微笑んだ。

「あの日から、お会いした時にこの文をお渡ししようといつも懐に抱いておりました」
この日からふたりの交際が始まったという噂である。

娯楽の少ない城中で、この逢引の噂と出会いの馴れ初めはあつという間に広がった。このような筋立てが本当かどうかはわからないが、ふたりが付き合っているのは事実のようである。

噂は広がっていくうちに、様々な想像が加えられて、その姿を変える。そして、噂を周りに広げる情報通と呼ばれる人たちが、どこかで見つけたわかりやすい話をさらに加えて興味を持たせ、

根も葉も無い噂がさらに広がっていく。悪意という隠し味が振りかけられた噂は、腐れば腐るほど美味しくなるのだ。

これらの噂の根底には、お菊の器量が城下の男たちの評判になっていくことへの嫉妬がある。三百石取りの馬廻り役の娘で、しっかりと仕事はするが、どこかおっとりした風情がある。役者のような庄之助と美しいお菊なら、お似合いだという声も上がっていることに、冷や水をかけようという魂胆だった。

女中頭補佐になっていた楓は、ふたりの話で持ちきりの女中たちに声をかけた。

「そんな話ばかりしてきやダメじゃないの。さあ、そろそろお仕事をしなさい」

へいつから、ふたりはつき合っていたのだろうか。妾のことなんか爪先ほども気にかけない筈だ。そう感じた楓は、噂を利用してふたりの仲が壊れてしまうような方法はないかと考えた。

噂に翻弄された自分の人生を、今度は噂を生み出すことで、噂に復讐ができる。重ねて、お菊と庄太郎にも罰を与えることができる。

城の帰り際、楓は奥女中の静香に声をかけた。静香は名前に反して、お喋りである。しかも、あまり物事を深く考えない質である。頭の足りない分、実に都合がいい。

「あなたたちも、庄之助さまとお菊さんのことを喋らないようにしなくっちゃ、ダメよ」

静香は、「はい」と殊勝に頷いた。

「こういうことは暖かく見守ってあげることよ。騒ぎすぎると逆効果になっちゃう」

部下を心配するふりを続けた楓は、さらに続けた。

「お菊さんも、こうした噂で体が悪くなっているのかしら。この間も手水の前を通りかかったら吐く音がしたから誰かと思ったら、お菊さんだった。体が悪くなってなきやいいけどね……」

静香は、回らぬ頭でこう考えた。

「吐いていたなんて……一人はつきあっているし、もしかして妊娠かもしれない……これはみんなに教えなくっちゃいけないわ……」

楓は、女中頭の琴にも、ふたりの噂を相談した。

「琴さま。女中たちの間で、お菊さんと庄之助さまの恋の噂が持ち上がっております。そのために、みんな仕事に手がつきかねております。どうしたものか……」

「若い娘だからしょうがないのよ。そこまで問題にすることはないでしょう」

「例えば、静香さんのように、根も葉も無いことを持ち出して騒いでいるものもおります。あまりいいことではありません」

「こういうことは、抑えようが無いのよ。若い娘たちは分別がないから……。下手に禁止したら、反対に大騒ぎになってしまう。こういうことは、私たちが何かをすると、みんなにしこりができ

てしまうのよ……」

楓は、「でも」と小さくつぶやいて、引き下がった。

手も繋いだことのないふたりの淡い恋は、お菊が妊娠したという噂にはなったものの、お菊の腹がせり出したこともなく、普段と変わらない明るさを示しているお菊のために、いつしかその噂は消えていった。静香は、仲間から嘘をばら撒いちゃいけないと非難されていた。

楓は「ちっ」と舌打ちして、独り言を吐いた。

「何か面白いことがないかしら」

楓の瞳に怪しい炎が灯った。



ある日のことである。

暮れ方になって急に殿様のご佩刀がなくなったことに気がついた。城下は上へ下への大騒ぎである。あらゆるところを探してみたが、どこにも刀が見つからない。

小姓頭をつとめる庄之助にとって、殿の大事にしているご佩刀の紛失は一大事である。殿のご佩刀が失せたとあつては、自らの責任を命で補わなければならない。

長い一日が過ぎた。

結局、刀は小姓部屋の天井裏にあつたのである。

「自分の部屋に、殿のご佩刀があつたとは」

刀の隠し場所が庄之助の部屋だとすれば、嫌疑が向けられるのはまず自分である。

また、刀を隠したのが自分じゃないということが判明しても、監督不行き届きであるとの責任を問われる。

どちらにしても、切腹は免れない。

庄太郎にとつて、お菊との逢瀬どころではない。お菊との約束の場所である石垣の裏に駆けつけるわけにはいかない。

二刻ばかり待っていたお菊は、庄太郎が現れないまま家に帰った。今までにこんなことはない。急な用事があるときは必ずその前に連絡をくれていた。心配の募るお菊が、城内で殿の佩刀が紛失したとの騒ぎを知ったのは、夜半に帰ってきたお菊の父からであった。

お菊のもとに庄之助からの手紙が届いたのは、翌日の明け方になってからのことである。

殿様の刀を見失い、しかもその刀が自分の部屋から出てきたことに、責任を取らねばならない

ということがしたためである。そして、お菊との縁談を楽しみにしていたのに、無理になったと続いていた。幸せだった日々の思い出と、今まで付き合ってくれたお菊への感謝が綴られた文のあとに、自分のことを早く忘れて、誰かいい人を見つけてほしいとも書かれてあった。

庄之助は、悔しかったのか、紙のところどころに力を入れて握ったような皺があり、文字が涙で滲んでいる。

手紙を見たお菊の目から大粒の涙がこぼれ落ちた。

滲んでいた手紙の文字が、お菊の涙でさらに滲んで、文字が判らなくなってしまった。

お菊は涙が涸れるほど泣いた。

そして、しばらく虚空を見つめていた。

「お可哀想に、庄之助どの」

自分の命を差出して責任を取ろうとする庄之助を案じた。そして、誰がこのようなひどいことをしたのかと怒りが込み上げてきた。

〈だれにも迷惑をかけず、慎ましく生きてきたふたりなのに、誰が私たちの幸せを邪魔したのか。なぜ、こんなことをしたのか……〉

普段は怒りなどしないお菊だが、誰か判らぬ悪戯者を呪った。

〈ほんの軽い悪戯と思つてのことかもしれないが、自分のしたことがいかにひどいことがわか

らぬのか〉

と、お菊は憤った。

庄之助が切腹したのは、この事件から五日後である。

佩刀が見つかったため、経緯は深く調べられなかった。庄之助は、管理不行届として蟄居となつたのだが、責任感の強い庄之助は、わが命を天に捧げることで、殿に詫びようと考えた。

お菊は、庄之助を心配のあまり、床についた。

食事も喉を通らず、日々にやつれていった。

お菊は、枕元の観音像に祈った。一寸ほどの像は、庄之助が以前くれたものである。この像にふたりの幸せを祈ろうというために、お城の近くの寺でいただいたものである。

お菊は、この知らせを聞いてから枕元に観音像を置き、不思議な呪文を唱え始めた。

庄之助の切腹を知ったお菊は、翌日の同時刻、庄之助のあとを追って、城の井戸に身を投げた。

〈井戸はあの世の入口と申します。井戸へ我身を投じて冥界に入り、死んだ庄之助さまと一緒に犯人を捜しましょう……〉

その夜は満月である。

どぶんつ。

井戸の中で反響して遠くまで水音が響いた。

深い井戸の中にかろうじて射していた月の光が、水音とともに乱れたように思える。

静寂が再び訪れた。

月を黒い雲が覆い、井戸の周りには深い闇が広がっている。

お菊が自害したあと、役人たちが井戸の中を浚ったが、不思議なことにお菊の屍体は見つからなかった。



楓は視線を感じた。誰かに見られている気がする。

それが、しばらく続いた日、かすかに庄之助の声があった。

「拙者はこれでも殿に仕える小姓でござる。殿の刀など持ち出すわけがございませぬ」

お菊の声も続いた。

「あなたとの契りは来世までと約束したではありませんか。私の命も庄之助様のものでもござります」

それからふたりの声が頭の中に響く。

「ならば、あの刀を隠したのは誰じゃ」

何かを探すようなガサゴソという音が遠くからだんだん近づいてくる。かすかに聞こえていた

「どこじゃ、どこじゃ」という声も、耳元に近づいてきた。楓の身体は動かしたくても動かせない。

床の中で助けを呼ぼうと思っても、声が出ない。

「許してください、許してください……」

心の中で唱えるのだが、ふたりの声が明け方近くまで聞こえてくる。

微睡が襲ってきた。これで楽になれると思った刹那、「死ぬ」というふたりの声が聞こえた。

怒気をはらんだ重い声が……。

これが何日も続いた。

楓の悪戯にも似た行動から、ふたりは悲しい運命を辿ってしまう。悲運を生み出した楓に対するお菊たちの怨嗟は凄まじいものであった。それを後悔するには遅すぎる。ふたりは楓の過ちを、決して許さない……。

……私のほんの気まぐれ

……私のほんのいたずら心

……私のほんの思いつき
……私のほんの出来心
……私のほんの嫉み
……私のほんの妬み
……私のほんの醜い心

楓は何も見えない場所に向かって幾度も幾度も謝った。

「お菊さん、庄之助さま。悪気はなかったのをごさいます。ほんの少しの悪戯、心で刀を隠し、貴方たちのうろたえるさまを眺めていたかったです。まさか、このような結果になろうとは、少しも思いつきませんでした。本当に申し訳ございませんでした」

ふたりがこのようになったのは、楓のせいである。

そして、責任を取らねばならぬこともわかる。

ふたりを死なせてしまったのは、〈私の心が荒んでいたためだ〉と、楓は思う。

庄之助とお菊が死んでからひと月ほど経った頃、楓が番所に出向いてきた。

髪がほつれ、焦点の定まらない眼の周りには黒い隈が浮かんでいる。

役人のうしろに誰かが立っているように楓は怯えている。

楓は役人に向かって、ゆっくりと言葉を發した。

「お殿様の佩刀を隠したのは庄三郎様ではござりませぬ。わたしでござりまする」

楓は、これだけいうとほっと安堵の息を吐き、体中の力を抜いた。

そして、へろへろと倒れかけた楓は、何かから解放されたようにゆっくりと身を土間に横たえた。

楓は、自分の噂がご城下に広がるだろうと思っていた。二人の中に嫉妬した楓が殿の刀を隠して二人に罪をなすりつけるといふ単純明快で、庄之助とお菊は善人、楓が悪人となった話……。

だが、その噂では、楓の悲しい心のことは何も伝わらない。ただ、庄之助とお菊の悲恋のみが強調されている。

自分の知らないところで、自分の罪がどんどんと広がる。刺された傷からどくどくと血が流れるように、お城の周りをどす黒く染めていく。



楓は、札の辻で磔となり、三日三晩、札の辻で晒されたのち、無縁仏として寺に打ち捨てられた。しかし、無実の罪で死んだ庄之助やお菊の命が甦るはずもない。

お菊が入水した刻になると、毎夜、井戸の近くにお菊の幽霊が現れるようになった。

お菊の亡霊は、まるで自分たちの幸せを邪魔をする者がこの井戸を訪れないように見張っているようでもある。

お菊の恨みは、維新を迎えても消えていなかった。

松山城の三の丸にあったお菊井戸の場所は、のちに松山連隊の大射撃場になった。

火薬庫のそばの雑木の中に井戸がそのままにあり、『危険につき近得るべからず』の一札が立てられていたという。

この場所では、歩哨が水に濡れたお菊の姿を見たり、地の底から聞えるような恨みのこもった声に悩まされるといことがあった。見張り番が井戸の近くにあった弾薬倉庫の白壁に銃剣を突き込むことが幾度となくあったともいう。時を越えて、お菊の憎しみは続いていたのである。

いつの頃だろうか。井戸は取り壊されてしまったが、庄之助とお菊の悲恋は今でも時折聞かれることがある。噂話ではなく、古の物語いにしえとして……。